

「ですけれども、もう飽々したのですもの……」

いふ折しも下婢が上つて来て、

「奥様、御客様ですから、些と下までお降り下さいませんか。」  
と告げた。

「さうかい、唯今降りますよ、誰方！」

「少しも存じない方ですけれど、藤川の奥様にお目に懸りたいと仰やいますから、御不快でお寝つてゐらっしゃいますと申し上げましたら、それでは御主人にと仰やるのでございますよ。」

「へえ……藤川の奥様に會ひたいなんて誰方が知ら……お名前を承つて来ましたか。」

「はい、誰方様でございますと伺ひ申しましたら、木下といふ者だと仰やるのでございます。」

「お幾歳位な方なの！」

と清子が不安さうに問ねた。

「左様でございますね、二十八九、三十位でもございませうかね。」

「何にしても、唯今お目に懸るから、御通し申して、お茶でもお進げなさい。」

「畏りました。」

下婢は匆々降りた。道子は不審さうに、

「お前に逢ひたいなんて、誰方だらうね木下なんといふ方を知つてるの……」

「いゝえ、そんな方少しも存じませんわ何用があつて来たのでせうね。」

「何用だが更り知れないわ……左に右面會して見ませうよ。」

「早く逢つて見て頂戴な、そんな方が何用あつて入来したのだから、合點が往きませんわ。」

「では、逢つて見ませうよ。」

道子は、下へ降りて、衣紋を正した後應接室へ入つた。

## 五十四

「娘に面會がなさりたいと仰やりましたさうですけど、生憎數日以前から、少々不快で臥つてをりますが、如何やうな御用向でせうか、私が代つて承はりたうございます。」

道子が、頼しう憊う挨拶した。木下祐天は肩を聳かして、警乎と眺めながら、「申し後れましたが、私は新聞紙上などで、御承知でありませうけれど、強を挫き、弱き援けるために、赤手組といふ一つの團體を作つてをる、木下祐天といふ者であります、今後はちよく伺ひますから、能くお見識置を願ひます。」

「左様でゐらっしゃいますか、して娘を御存じでらっしゃいませうか。」

道子は赤手組が何だか、新聞紙に何か書てあるか、那樣ことは知らないけれども唯來意が聞きたい爲に、憊う問ねて見た。

「私は能く知つてをりますが、清子さんは恐らく御存じあるまいと思ひます、何故か

と申しますと、お目に懸つて辭を交したことはないですからね。」

「唯今下女から、お名前を承りましたけれど、木下様といふ方は記憶にないと、申すんですよ。」

「然うでせう、蔭ながらお顔を知つてゐるので、お目に懸つたことはないですからね。」

「して、何ういふ御用向でゐらっしゃいませうか。」

「どうか清子さんに、お金子を貸して頂きたいと存じまして、それで御訪ねしたのです。」

道子は一目見た時から、薄氣味の悪い男だとは思つてゐたが、この辭を聞くが否や忽ち胸にギクリと釘を打たれたほど、悪感を覺えた。

「それでは、清子にお金をお貸し下すつたことでもおありなさいませうか。」

木下は巻簾を悠々と吹しながら

「お貸し申したのなら、返して下さいと當然請求爲ますけれど、貸して頂きに上つた

のですから、お貸し下さいと申すのです。」

道子は益々不審さうに

「お辭は解りましてございますけれど、それでは清子がお貸し申すお約束でも致した  
のでせうか。」

「何有そんな、約束などはないですよ。」

「致しますると、何ういふ仔細で、清子からお金子が借りたいと仰やるのでせうか、  
其仔細を詳しく承はりたいものでございます。」

「なるほど御有理です。それでは憚う仰やつて下さい、相州小田原の海濱で、黒田と  
いふ男と、天狗岩に腰を掛けてお話なすつた、秘密事件を、残らず私が立聴して知  
つておりますが、新聞の探訪にでも話して遣れば、纏つた御禮が貰へるのですけれ  
ど、それでは清子さんが可愛さうですから、他言を爲ない代りに、どうか二百圓  
だけお貸し下さいと」

意味ありさうなこの辭には、道子も吃驚して、顔色さへも青褪めて、

「左様でございますか、お辭を聞きまして私には少しも事情が解りかねますから、  
娘に相談致して御挨拶申上げますから、暫時お待受を願ひます。」

「少々急いでをりますから、成だけお早く願ひますよ、應じられないと仰やるのなら  
強ひてとは申さないんですからね。」

「承知致しました、どうぞ暫時……」

と道子は會釋して室を出て、直に二階へ上つた。而うして戦々顛へながら、

「清子さん、大變な人が來たんだよ、苦しからうけれど起て下さいよ。」

大變と聞いた清子は、俄破と起上つて不安の瞳を睜つた、

「大變な人ツて、何爲に來たのです。」

と辭忙しく問ねた。

「お前さんに、金子が貸して貰ひたいと言つて、強請に來たんだよ。」

「えッ、私にお金子が貸して貰ひたいツてね。」

## 五十五

「本當に薄氣味の悪い男なんだよ、可厭に肩を怒らして、鋭い眼を睨つてさ……それでもつてかういふことをいふのだよ、小田原の天狗岩とかで、黒田といふ人と、お前さんが、話してゐた秘密を、残らず立聴して知つてをるから、新聞の探訪に話すと、纏つたお禮が貰へるのだけれど、それではお前さんに氣の毒だから、口留料に二百圓貸して下れと、當然だといふやうな、口の利き方するんだもの、何と挨拶して宜いか、私には挨拶が出来ないから、お前さんに相談に來たのだよ、一體立聴したといふのはどういふ話なんだらう、何か他に聞かれて悪い話でもしたのかい。」と問ひかけた、清子は天狗岩での密談と聞くより、早くも眞青な顔をして聞いてをつたが、力のない聲を出して、

「そんな話を聞かれましたね、どうしたら宜いでせう……」  
 早も仔細を語らなくて、泣かないばかりの聲を出す、道子も有繋に駭いて、

「どうしたら宜いでせうって、一體何のことなんだね、早く事情を話して御覽よ。」  
 促がすやうにいつた。

「阿母様堪忍して下さいね、私今日までお話ししないでましたけれど、恥しい目に遭はされたんですよ。」  
 と涙を零した。

「まあ早く事情をお話なさいよ、早くといつて下に待つてるぢやありませんか。」

「では、話をしてをれば、長い話なんですから、かうして下さいなお金子は何と申しますけれど、父様が明後日でなくては、お歸りなさらないから、父様の不在中には、二百圓どころか、二十圓の金子も融通が就かないから、明後日の午後三時に來て下さいと、さう挨拶して下さいな……。」

「諾矣、それでは左に右さういつて歸すことにしませう。」  
 と立かける。

「しかし母様、必らず怒らさないやうに、機嫌を取つて歸して下さいね。」

「さうですとも、あゝいふ人は、優しくいつて歸して遣るのが、何よりです、怒らせやうものなら、何を爲出かすか知れないからね。」

と急いで下へ降りた。

「どうもお待せ申して相済みませんでございましたね。」

いひつゝ座に着いて、

「お辞の趣を娘に申聞せましたところが、さういふ理由ならば、お金子はお望み通り差上げますけれど、何を申しましたも、唯今主人が不在でございませうから、娘や私共では、二百圓は勿論二十圓のお金子も持合せがございませうから、甚だ勝手にございませうけれど、主人が明後日は歸宅する筈になつてをりますから、明後日の午後三時を期して、今一度御足勢が願ひたいと斯様に申しますが、如何なものでございませうね。」

腫物に觸るやうに、怖々いつた。木下は無言の儘熟と考へてをつたが、

「しかし、澤山の金子ではなし、高が二百圓ばかり、何とかならないことはないでせ

う、どうか明後日など、仰やらずに、今日拜借したいものですね。」

「それはもう、私共で御用が達せまますなれば、明後日差上げるも、今日差上げるも同じことですから、差上げたいのが山々でございませうけれど、主人が歸りましても、二百圓といふ大金は、逆も手許にはございませうから、何れかへ參つて拜借して來ることゝ存じますから、どうか明後日まで御待下さるやうに願ひます。」

「では、明後日の午後三時を期して伺ひますから、どうか間違ひなく御拜借を願ひます。」

「承知致しました。」

木下は不平相な顔をして歸つて往つた。

## 五十六

木下が歸つて往くと、道子は急いで二階へ上つた。見れば清子は死人のやうな顔色をして、ハンケチで目を押へてゐた。道子は心配顔をして傍へ座つたが、清子の顔色

の常尋ならぬのを見ては、若しやこれが爲に病氣が重くなりば爲ないかと、軀が氣遣はれぬではなかつたが、しかし今はそれにも増した心配が在るので、躊躇することを許さなかつた。

それゆゑ物靜に、優しい調子で、

『どういふ事情が在るのかは知らないけれど、何といふ鐵面皮な人でせう……明後日御足勞して下さいといつたら、二百圓ばかりの金子だから、何でも彼でも今日貰ひたいといふのだよ、假令此方に弱味が在るにしても、強求に來ながら、當然受取るべき貸金でも受取に來たやうな態度だから、呆れて了ひました。しかし今日は主人が不在でもあるし、宅にゐたところが、二百圓といふ大金は、何處かへ往つて借りて來なければ、宅には無いといつて斷つたものだから、止むを得ず明後日來るといつて、歸つて往きました。一體まあお前さん、藤川の留守中に、何を爲出來して下れました。間違つたことでも爲出來さうものなら、私共が藤川へ對して責任が濟まなひではありませんか、早く様子を話して下さい。』

眼に不安の色を滿へて問ひかけた。

『阿母様、どうか御勘辨下さいまし、私どもでもない目に逢はされましたのでそれがために御相談致さうと思つて、俄に歸つて來たのですけれど、如何にも恥しいお話にならないことなのです。お話をやうか、それとも此儘忍んでをらうかと、毎日其ことばかり心配して居るものですから、それがために病氣して了つたのです。が、運悪くも今來た人に秘密を聽かれた上は、最早隠してゐられないのみでなく、藤川との關係が破れて了ふかも知れませんが、何も彼も打明けてお話をしますか、どうぞお聞きなすつて下さいまし。』

と小田原の海賓館に於て、黒田鐵彦の爲に拭ふことの出來ない、汚辱を受けた一伍一什の顛末を物語つた後。

『そんな酷い目に遭はせながら、麻酔中を幸ひにして、知らない顔をしてゐるものです。すから、腹の中が張裂けるほど口惜しくて堪らないものだから、それとなく當擦りをいつて遣りましたから良心が咎めたと見えて、私に是非共内々話したいことがあ

るから、濱邊へ散歩せんかと勧めましたから、屹度身の罪を懺悔するのであらうと思ひまして、決心して一緒に往つて見たのです、すると天狗岩といふ、大きな岩の裾に腰を掛けて、すつかり罪惡を自白して、どうか宥して下れと、只管謝罪しましたけれど、私の軀は藤川といふ、名譽ある軍職に在る良人があるのだから、兩親と相談の上でなければ、宥す宥さないは、申されないといつて、其儘別れて歸京して了つたのです、それを唯今參つた人が、屹度立聽したのだと思ひますから、万に一つも新聞などに出されやうものならそれこそ私の一生は葬られて了ひますから、二百圓の金子には換えられないと思つて、それで明後日渡すと申しましたけれど、それに就ては、お父様へ御相談して、黒田へ懸合つて、黒田に何とか處置して貰はうと思ふのです、私の身には一點の疚しい所はないのですからね。」

と告げた、道子は幾度か駭き、幾度か呆れて聞いてをつたが、聽了ると共に、

「まあ怖ろしい目に遭はされたものだね麻酔劑などを服まされて、能く生命に別條が無かつたわね……だけれども、そんな大變事を、今日まで黙つてゐる人があるもので

すか……左に右直に父様へ電話をかけて、歸つて頂きませう。」

「もう三十分ばかりで御歸りに成りますから、電話には及ばないでせう。」

## 五十七

道子と清子との母子が、額を鳩めて相談してをる處へ、主人徳造は半日の勤務を了へて、電燈會社から歸つて來た。それと知つた道子は、玄關に出迎へて、直に二階へ伴ふた。而うして、清子が小田原の海賓館に於て、黒田辯護士の爲に、麻酔劑を飲ませられたこと麻酔中に汚辱を加へられたこと、そのことに就いて密談しつゝある處を、木下祐天といふ、惡漢に立聽されたこと、それを奇貨として木下が二百圓の金子を強請に來たこと、明後日の午後三時を期して、二百圓の金子を渡す約束をして歸したことで、詳しく物語つて、如何に處置すべきかを問ねた。

寢耳に水の變事を聞かされた徳造は、有繋に耳を傾けて聽いてをつたが、やゝ暫時熟考の後、

「それはとんだことをしたものだね、お前の精神に疚しい點がないにしても、世間といふものは、決してさう認めないからね……しかし憎むべき奴は黒田辯護士だ、麻酔劇なぞ用ひて、良人ある身を汚すといふ、そんな惨酷な話があるものか、宜しい、私が考へるところがあるから、これから直に黒田に會見して、其上のことにするから、必ず騒がずに、知らない顔をしてをるが宜い。」

「とんだ不調法を致しまして、何とも申譯がございませんけれど、どうぞ宜しくお願ひ申します。」

と涙ながらに清子が訴へた。すると道子も其尾に就いて、

「黒田といふ人と、親く交際したのは、清子の失策ですけれど、しかし藤川の友人といふのと、一つは大久保の親戚といふ點から、藤川の將來のことを考へて、實際した次第ですから、どうぞまあ黒田と十分に御相談下すつて、これ限り世間へ知れないやうに、圓滿に解決して遣つて下さいまし。」

「左に右直に往つて來るが、黒田の宅は何方であらうね。」

「芝の明舟町と聞いたばかりで、番地は知らないのですよ。」

「辯護士といへば、番地は知れなくつても、直に分るだらうね。」

「虎の門の琴平様から半町ばかりより隔つてゐないさうですから、直と知れやうと思ひますわ。」

「では往つて來やう。」

立上つた、道子は慌て、

「貴方御飯がまだでゐらッしやいませう、支度が出来てゐますから、召上つてゐらッしやいまし。」

「さほど空腹でもないから、歸つてから寛り食へることにしやう。」

と勤務服の儘で出かけて往つた、豊川稻荷前の停留場から電車に乗つて、赤坂見附から新橋行に乗換えたが、電車の中で、絶えず黒田に對する要談を考へるのであつた。



「大久保中將の甥で、法律を稼業にしてゐながら、法律上の大罪を犯すといふは、實に怪しからぬ人物だ、萬一先方の出やうに依つては、設令藤川との縁談が破れるまでも、懲戒して遣らなければならぬが、どうか宅にをれば宜いがね。」

かゝることを考へてゐる間に、電車は早くも虎の門の停留場へ着いた、直に飛降りて明舟町の黒田辯護士と問ねたところが、早速知れたので、急いで訪れた。

「御免下さい。」

聲に應じて玄關脇の一室から書生が出て来た。

「何か御用ですか。」

「黒田様が御在宅ならば、菊岡といふ者が御面會が願ひたいと、左様御取次が願ひたいです。」

「暫時御待下さい。」

言葉で、奥へ入つたが、寸時経つと、又姿を顯して、

「どうぞ御通り下さい。」

と應接室へ案内した。

## 五十八

杉の上に絹の羽織を着た黒田鐵彦は、菊岡を案内して在る應接室へ入つた。しかし渠は菊岡と聞いたのみであるから、何か事件の依頼者であらうと考へてゐたのだ。相對して椅子に着くが否や、

「お待せ致しました、私が黒田です。」

と挨拶しつゝ、菊岡の顔を見た。

「突然同つて失禮致しましたが、私は貴方が御承知の藤川龍夫の妻、清子の父であります、以後お見識置を願ひます。」

と挨拶を返した。清子の父と聞いた黒田は、ハツと驚くと共に、清子の父が突然何用で来たのであらうか、屹度清子が例の事件を打明けた爲に、其詰問に来たのであらうと早くも來意を想像すると共に、顔色は見る／＼中に沈むで了つた。

「左様下りましたか、存じないこととて失禮致しました。」

少に答へた。菊岡も黒田の顔色を瞥々と眺めながら、

「早速ですが、清子の身の上に就いて、少々御内談を遂げたいことが在つて伺ひました。此處でお話してもお差支へはないでせうか。」

仔細在りげに問ねた。

「差支へはありませんが、しかし然ういふお話でありますのならば、失禮ながら席を移して承はることに致しませう、どうか別席へお通りを願ひます。」

と自ら先へ立つて、二階の客室へ案内した。

「此室なれば、如何なる御話でも、他に洩れる憂はありませんから、安心して御話下さい。」

「内談といふは別儀ではないですが、小田原の海賓館に於て、清子へ對して、意外なことをされたさうですが、實は今日まで清子は、何事も告げないで、唯不快だと申して床に就いて臥つてゐましたから、豈夫に彼様の大事件が在たことなどは、夢に

も知らなかつたのであります、が今日は秘して置くことが出来ない事情が生じた爲に、私へ漸く打明けましたので知つたやうな、次第でありますか、一體何ういふ考へから、あゝいふ大膽な大罪を犯されたものでせうか、私には貴方の眞意を知ることが出来ないであります、苟めにも法律を専門に、他の辯護をなさる人が、人の妻たることを御承知でありながら、それも得心上ならば、清子にも十分なる罪がありますけれど、聞くも怖ろしい藥劑を用ひて、痲酔中に汚辱を加へるといふは、御身分柄唯々呆れる外はないのであります。餘りといへば無法亂暴な爲され方でありますから、御答へに依つては、清子の名譽を犠牲にしても、此儘捨て置くことはなりませんから、十分なるお答へが聞きたいものであります。」

「御詰問の事柄に就きましたは、我ながらも何うしてあゝいふ大膽なことをしたであらうかと、實に不可思議に堪へられないです……しかし清子様の美しい姿を見て、戀の慾情を制することが出来なかつた結果と、申上げる外はないと考へますが、最

早貴方のお耳へ達した以上は、如何なる御處置、如何なる問責も甘んじてお受け致しますから、御存分の御處置を願ひます。」  
と男子らしくいひ放つた。

「それでは、自分が悪かつたと悔悟されて、私の處置に一任するから存分にせよといはれるのですね。」

「如何にも左様であります。しかし私の名譽上、又清子さんの名譽上、公の御處分を許して頂くことが出来ませんならば如何なる謝罪も甘んじて致すでございます。」

「然ういふ貴方の御精神なら、強ち公の處分に訴へやうとはいひませんが、私に謝罪の條件が在りますが、其を承諾して貰ひたいです。」

### 五十九

「公の處分をお許し下さる上は、如何なる謝罪條件たりとも、決して違背は申しませんから何なりとお聞かせを願ひます。」

黒田が飽まで順しくいつた。

「それならば申しますが、第一の條件としては、今後如何なる事情があらうとも、清子の一身に迷惑をかけない事、第二の條件としては、第一妊娠でもしてゐる場合は生兒を引受けて處置する事、第三はこの事件から生じた總ての損害を負擔する事、第四は相互の名譽上、飽まで秘密を嚴守する事、この四條件を承諾して貰ひたいですが如何でせう。」

「宜しうございます、四條件共確に承諾致しました。」

「然らば、どうか具體的に書面に認めて頂きたいです。」

「承知致しました。」

と黒田は早速紙や硯を取出して、誓約書を認めした後、署名捺印して菊岡へ渡した、菊岡は一見した後、懐中へ納め入れた。而うして再び徐ろに口を開いた。

「ところで、改めて御相談致したいのは第三の條件が既に持上てゐるので、非常に當惑してをりますが、如何致したものでせうか、實はこの條件が持上つた爲に、今日

まで秘密にしてをつた清子が、止むを得ず事實を打明けるやうな始末に立至つたのです。それは他の事ではありませんが、今朝の事ださうです、私は会社へ出勤して不在でした。木下祐天といふ、赤手組とか申す、不良青年の首領が來まして、貴方と清子が、小田原の海濱で密談してゐられた所を、立聽したとかで、二人の關係を殘らず知つてをるから、二百圓の口留料を出せば宜し、さもなければ、新聞の探訪へ材料を賣り附けると強請に來たさうです。新聞に出されでもすると相互の恥辱になる事だと考へたものですから、明後日の三時を期して、二百圓の金子を渡す約束をして漸く歸つて貰つたさうですが、私が會社から歸つて來ますと、涙ながらに事實を話しましたので、それでは黒田さんへ會つて相談して來やうと、歸るが否や伺つた次第であります。何か御名案はないものでせうか。」

と相談した、木下祐天と聞いた黒田はハツと驚いたが、菊岡の辭の了るのを待つて「いや、其木下に就いては、私も非常に頭を悩ましてゐるのですが、到頭貴方の宅へも上りましたかね。」

と苦い顔をする。

「それでは、此方へもう、參つたのですか。」

菊岡が呆れたやうにいつて問ねた。

「もう一週間ほど以前ですが、彌張其事件で強請に來まして、到頭百圓持つて往かれたのです。實に悪い事は出來ないものです、豈夫誰も聽いてる人はないと安心して話したのが終生の失策でした、天知る地知るの戒めは承知してをりながら、注意を拂はなかつたのが、私の缺點でした。それも普通の人にも聞かれたのなら、まだしもいくらか安心ですけれど、社會のバチルスともいふべき、惡漢に聽かれたのですから、殘念ながら、要求を容れて遣るより外に、施すべき術はないのです、惡事の罰とはいひながら、悪い奴に聽かれたものです。」

と嗟嘆の聲を洩らすのであつた。

「左様ですか、實に悪い奴でございますね、それでは、今後と雖も、秘密を種に、度々強請に來るのでありませうね。」

「決して二度と来ないとは誓つて歸りましたが、何しろ箸にも棒にも掛らない奴ですから、私も心密かに心痛してゐるのであります。」

「眞箇さういふ悪漢に秘密を握られましたは、困つて了ひますね、何とか良い方法は無いものでせうか、強請に来る度毎に、貴方へ御厄介かけるも、實にお氣の毒千萬ですからな。」

## 六十

黒田は寸時考へてをつたが、如何にも窮したやうに、

「私も先日以來、木下に就いては、種々考へてゐるのですけれど、何しろ相手が名譽も外聞も管はない、さういふ強請、騙取を稼業にしてゐる悪漢なので、金子のある間は来ないでせうけれど、窮して来ると、屹度又やつて来るに相違無いと思つてゐるのです。ですからさうかしてそれが防ぎたいと思ふのですけれど、これといふ良案が無いので、實に心痛してゐるのです。私どもの名譽に關することなれば

斷乎として拒絶して了ふのですが、清子さんへ御迷惑の懸ることですから、さういふ理にも參りませす、矢張残念ながらも、請求に應ずる外、只今のところでは、これといふ良案がありませんから二百圓の金子は、私から明日までに御届けすることに致しますけれど茲に一つの御願ひといひますのは、渠が要求に參つた際に、假に二百圓要求致しましたら成るべく半額若くは、其幾分に應じて、要求の全部渡さないやうにして頂きたいです、何故かと申しますと、只今も申します通り、渠輩は飽くことを知らない奴輩ですから、幾程與へましても、殆んど湯水の如く浪費して了ひますから、澤山與へても、少く與へても同じ結果を來すのですから、強請に來た際に、少し宛幾度にも要求に應ずる外、他に手段はあるまいと考へます。」

菊岡は默然として聞いてをつたが、如何にも同情したやう、

「成程さういふ悪漢でありましては、さういふ方法でも講ずる外無いでせうね宜しうございます、それでは二百圓の要求に就きましても、成たけ少く與へるやうに、十分注意することに致しませう、而うして、二度と參らないやうに、堅く契約して渡

「しませう、如何なる悪漢に致ましても多少の義理人情は辨へてをりますから、堅い約束致ました上は、三度來るところは、二度、二度來るところは、一度より來ない道理ですからね、さういふことに計らひませう。」

「どうか、さういふやうに願ひたいものです、其中には、あゝいふ悪い奴ですから、屹度何かしらで檢舉されるに極つてをりますからね。」

「左様なれば、甚だ我儘の申條ですけれど、明日何時頃伺ひましたら宜しうございませうか、私は午前中會社へ出勤致しますから、願くは午後に願ひたいと思ひますが、御都合如何でせうか。」

「私の方も午後の方が好都合ですから、それでは午後の四時を期して御目に懸ることに致しませう。」

「宜しうございます、それでは四時までお繰合せの上御待受を願ひます。」

「承知致しました。」

「左様なれば、これにて失禮致します。何分にも宜しく願ひます。」

と菊岡は別れて歸つて往つた、黒田は後で腕組をして、頻りに考へ込むでゐたが、太息を洩らして、

「こりやこの儘には棄置けない哩、何とか木下を防ぐ方法は無いか知ら……彼奴に秘密を握られてる限りは、いつまで経つても、この苦痛を免れることは出來ないがね……。」

と又寸時沈思して、

「二百圓の金子を受合ふには受合つたもの、實は莫迦々々しい理だね、僅か一週間経つか経たない中に、三百圓の金子を強請られるのだからね……といつて菊岡へ約束した限りは、今後は左に右、這度ばかりは渡さない理には行かないし……さうにかして調達しなきやなるまいが、秋子との結婚も切迫してをる今日、二百圓の金子を取られるのは、如何にも辛いけれど、これも身から出た錆で止を得ないね。」

## 六十一

木下祐天は、約束の如く翌々日の午後三時に菊岡家を訪れた、木下が来るのを待受けてをつた徳造は、直に一室へ導いて會見した。挨拶が終ると徳造は嚴然と威容を整へて、

「一昨日御入來の際は、不在の爲に御目に懸ることが出来なかつたですが、家内の者より聞く所に依りますと、娘の清子が小田原に滞在中、黒田とか申す悪者の爲に、心にもない耻辱を受けたのを、君が立聽されたとかで、口留料として二百圓の金を請求されたさうですけど、私はさういふ災難を受けたことも、實は一昨日まで夢にも知らなかつたやうな状態で、恚々斯様だと話されて、始めて事情を承知して、非常に驚くと共に、黒田の非道を憤慨してゐる折柄ですが、君も御聽の如く、清子は眞箇黒田のために、可哀相な目に逢はれました、爲に歸宅後病氣を發して、今に床に就いてゐるやうな状態ですから、一昨日御入來下すつた節は、只々當惑の餘

り、今日の三時を期して、御要求の二百圓を、お渡しするやうに申したさうですけど、この事件に就きましては、秘密に附して置かれぬ事情がありますので、これより黒田に會つて、十分の問責した結果、事と場合によつては、告訴しやうかと思つてをる位ですから罪惡は黒田にあつて、清子には十分同情すべき點こそあれ、責むべき點は無いのですから、若し口留料を要求されるとすれば、黒田を責めて、渠から御取になるのが、所謂強きを挫いて弱きを援ける、君等の主義に一致する理で、意外の災難に遭つて、病氣に罹つてゐる、可憐な女を責められるといふは、君等の任侠に相應しからぬことだと、憚りながら考へるのですのみならず、私は會社へ勤めて、僅かばかりの俸給を貰つてをる身分ですから、漸く日々の生活をするだけに過ないので、百圓の二百圓のといふ大金は、到底要求に應ずることは出来かねますけれど、私の志だけならば、包金にして差上げますが、何でも彼でも要求通り出せといはれるなら、止を得ず御断り申す外はありませんが、如何でせう、それで御承諾下さるでせうか。」

と問ひかけた。木下は二百圓の金子を受取られるものとのみ、確く信じて來訪した  
 ことゝて徳造の辭には少からず不満を感じたのであつた。しかし徳造の辭の中には、  
 ことゝ場合によつては、清子の名譽を犠牲にしても、黒田の罪惡を問責する意向もあ  
 る、殊に清子には一點責むべき、罪惡がないのであるから、同情すべき秘密に附入つ  
 て、多額の金銭を請求するのは、不當であると思はぬではなかつた。  
 けれどもこの場合、軟弱の態度を見せては、取れるべき金子が取れないと考へたの  
 で、飽まで強硬な態度を示して、

「これは又意外な挨拶を承くものですね今日參つたのは、一昨日の御約束に基いて、  
 二百圓の金子を頂戴に上つたので、かゝる御挨拶を承くが爲に參つたのぢやありま  
 せん、清子さんの代理として、奥様と御約束したのですから、どうか奥様にお目に  
 懸りたいものですね。」

「御有理な話ですけれど、妻も娘も、私が不在であつた爲に、途方に暮れた結果、あ  
 ゝいふ御約束したのですが、固より彼女等に二百圓は勿論十圓の金子とて、あるべ

き筈はないですから、畢竟私に話して、何とか都合させやうといふ、私便りの挨拶  
 をしたのに過ないですから、御目に懸つて見たところが少しも要領は得なからうと  
 考へます。ですから結局は、私の辭を承知して下さるか、それが可厭ならば、隨意  
 にして頂くか、二つ一つに願ふ外ないです。ですから、篤と御熟考の上、何れなり  
 と御勝手に御決定を願ひます。」  
 と、飽まで強硬の態度を示した。

## 六十二

徳造が随意にせよといはぬばかりの態度には、有繋の木下も確と當惑して、暫時熟  
 考してをつたが、固より金子が欲しさの惡企であるから、全然拒絶されでもすると、  
 蛇蜂取らずに了るかも知れないと考へたので、

「お辭は能く分りましたが、しかし新聞社の探訪へ材料を賣つても、相當の報酬は下  
 れるのですから、包金の多寡に依つては、其方へ賣つて了りますが、一體何程下さ



る考へです、それが承きたいものです。」「  
鐵面皮に問ひかけた、徳造は木下の氣勢がやゝ挫けたのを見て、我謀當れり、と  
心密に欣びつゝ、

「君の方で、新聞社へ持込むで、そんな材料位で、澤山な報酬が貰へるなら、寧ろ然  
うされる方が、宜いかも知れないですね、私の方では、いくら、かくらご金額を吹  
聴するほどは、到底差上られないですからね……しかし妻の者共が、お渡しすると  
いつて、約束した辭もありませうから、誠に不本意ではありますが、五十圓だけ包金  
にして差上げますから、それで宜しければ渡しますし、不承知なれば、御隨意にな  
すつて下さい。」「

と斷言した。木下は徳造の口態から想像して、十圓か、山々二十圓位より出さない  
ものと思つてゐたのが、五十圓と聞いたから、寧ろ意外に歡んで、

「事情を承はつて見れば、清子さんを責めるのは、御氣の毒な點もありますから、そ  
れでは、貴方のお辭に任せて、五十圓だけ貰つて歸る事に爲ませう、新聞社へ持込

んでも、五十圓より下れませんか。」「

「しかし、五十圓の金子は、私の境遇では大金ですから、無條件で差上げる理には行  
かないです、今後再びこの事件に就いて、金品を要求爲ない事と、飽くまで秘密を  
守る事と、新聞社へ洩さない事と、口留料として五十圓受取た事を明瞭に記した  
契約書が認めて頂きたいです。それを承諾して下さらなければ、絶對にお斷りする  
外はないです。」「

飽まで強硬にいひ放つた。木下は窮鼠に食まれた猫の状態で、忌々しくて堪へられ  
ないけれども、五十圓の金子が欲しさに意氣地無くも徳造の辭に従はなければならな  
かつた。

「契約書を認めなければ、渡さないといはれるなら、契約書は認めますが、實印を携  
帶してをりませんが、宜しうございませうか。」「

「實印は無くとも、君の自筆なら差支へありませんよ、契約書が物をいふやうでは、  
何事も徒目ですからね。」「

「それで宜ければ認めませう。どうか料紙と硯箱とが拜借爲たいものです。」  
 徳造は紙と硯箱とを取出して進めた木下は徳造が要求した、四ヶ條の契約書を認めて渡した。徳造は其を検めた後、

「では、五十圓お渡しするから、受取つて下さい。」

と十圓紙幣五枚を出して渡した。木下は手早く懐中に納めて、

「ごんだ、強請ケ間敷事をいつて相済みませんでしたが、どうか御勘辨を願ひます、もう此方へ御無心には上りませんよ。この後は黒田を責めて、彼から貰ふ事に致します。」

と挨拶すら匆々に立去つて了つた。徳造は冷に見送つた後、

「世の中には、可厭な厄介者がゐるものだね……他の弱點のみを、鵜の目、鷹の目注意して、萬一それが見附からうものなら、直に脅迫して金子に爲やうとかゝるのだからね、至で疫病神のやうな奴等だ、しかし二百圓の請求を四分の一で追拂つたのは、何より痛快だつた。どうかこれ限り來なければ宜いがね。」

いひつゝ、二階へ上つて、木下と談判した顛末を、道子、清子の兩人へ語り聞かせた。兩人は結果如何にと案じてゐた折柄であつたから、漸く胸を撫で下して安心した。

### 六十三

清子が小田原から歸つて以來、早くも一ヶ月半経過して、音なく落つる桐の一葉に、立初むる秋を知る頃とはなつた、この五十日ばかりの間に、黒田は木下の爲に兩三回秘密を材料に金錢を強請されて、其都度二十圓、三十圓と持つて往かれた。これが爲には、黒田は非當に懊惱するのであつたが、如何とも防遏する手段が無いので、他知れず其策を考究するのであつた。のみならず、黒田は秋子との婚禮も一週日の後に迫つてをるために、一層木下が無遠慮に來訪するのを、苦痛に感ずるのであつた。それに引替へ清子の方へは、不思議に木下が來なくなつたが、これは悪漢ながらも、清子に罪惡の無い事を認めてをるのと、一つは徳造が強硬の態度で談判を遂げた爲に、到底強請の効が無い事を知つたからであらう。

しかるに、清子の身には、いとも悲むべき現象を示して来た。それは在るべき筈の月経が無いと共に、體に異様の倦怠を覺えて、胸先がむか／＼するのみならず、食慾に変化を來して、正しく妊娠の徴候がある事である。

常人の驚は勿論であるが、かくと聞いた徳造夫婦の驚も非常なものであつた。

「ね貴方困つた事が出来ましたね、如何致したものでせう、萬が一藤川に知れやうものなら、大變ですがね。」

道子が心配さうにいひ出した。

「實に困つた事が出来たものだ、好事門を出でず、悪事千里を走る諺が在るから、誰の口から洩れて、藤川へ知れないとはいへないからね……今の中に何とか方法を講じなきやならないが、何うしたものだらうね。」

徳造も思案に盡きたやうにいつた。

「豈夫に這麼騒が起きやうとは、夢にも思つてゐなかつたものですから、憎い奴とは思ひながらも、我慢してゐましたが、かうなつた上は、赦して置けないではござい

ませんか、甚麼酷い目に遭はしても飽足りない奴でございますよ。」

道子が黒田の行爲を口惜しさうにいつた。

「黒田に對しては、既にかゝる場合の交渉が遂げてあるから、それは何時でも追窮する事が出来るけれども、差當つて困るのは、清子の體の處分だ、愈よ妊娠と極つた上は、藤川は無論の事、世間の知らない間に何とか始末を附けなければ、折角の良縁が破れないともいへないからね。」

「眞箇でございますよ、それが何より大切な事です、何か好い方法はないでせうかね。」

如何にも心配さうである。

「さうさね、別段これといふ方法が、今といふ今考へ附かないね……。」

嘆息しつゝ考へるのであつた。すると道子は四方に氣を配りながら聲を低めて。

「如何でせう、大きな聲では申されませんが、何とかして暗から暗へ葬つて了ふ事は出来ないものでせうか、然うでも爲なければ、到底藤川との縁は此儘圓滿に續くま

いと考へますがね。』

と徳造の心中を問ねた。徳造は此時まで熟考へてをつたが、驚の眼を瞪つて、  
『そ、そんな大膽な事がなるものか、萬一露顯でも爲やうものなら、忽ち刑法上の罪  
人にならなきやならないぢやないか……。』

『ですから、誰にも知らさないうやうに、秘密に致せば宜しいではございせんか。』  
『それがさ、露顯爲なければ宜いけれども、悪事は左右知れ易いものだから、萬に一  
つも知れた際には、清子は勿論我々まで相當の處刑を受けなければならぬから  
ね。』

『それでは、このまゝ分婉爲せやうと仰やるのですか。』

『そこまで考へてゐないのだ、我々ばかり騒いでも、當人に甚麼考へがあるか知れな  
いから、今日に限つた次第でもないから、三人寄つて、寛々相談するのだね、事茲  
に至つては、安全の道を選ばなきやならないからね。』

## 六十四

菊岡の二階では、徳造夫婦と清子とが額を鳩めて密談を始めるのであつた。軒端の  
風鈴に戦吹く夜風が通ふて、時々思ひ出したやうに、チリリンと鳴るのが、哀れに物  
淋しく聞えるのであつた。

可憐な清子が眼には、溢るゝばかり露を泛べてゐるのが、電燈の光に鮮かに見えた。  
『愈よ妊娠と極つた上は、何とか處置をしなければならぬが、それに就いても、お  
前の意見を聞く必要があるので相談をしやうと思つて上つたのだが、お前にどうし  
やうといふ意見があるなら、それから聞きたいものだね。』

徳造が問ひかけた。清子は静に涙を拂つて、

『私には、どうしやうといふ意見など、少しもございませぬけれど、藤川に知れない  
やうにしたいと、それだけ心配してをりますわ。』

『そのことに就いては、私共だつて同じ意見だけれど、藤川に知らさないやうに始末

するには、今の中に何とかして了はなければ、月が重なれば重なるほど、始末するのに困るからね。」

と道子が清子の心を讀むやうに其顔を眺めた。徳造は心配さうな顔をして聞いてをった。

「始末が就きさへすれば、そんな結構なことありませんけれど、どうして始末するの  
でせう……」

と不安さうに問ひ返した、道子は極めて聲を低めて、

「どうしてといつて、薬剤でも服用するか、手術でも受けるより外に手段はないわね。」  
「ですけど、手術を受けるには、専門家を煩はさなければ、自分で遣ることは出来  
ないでせうね。」

「それはさうですとも、いづれ婦人科専門のお医者様にお願ひ申すか、老練な産婆に  
でも頼むより外ないけれども、表面頼むところが、諾矣と承知する筈もなし、又  
此方にしても、そんなことを迂濶に頼む理にも行かないから、愈よそれと決心が就

いたら、内々聞合せて、頼むで見ろのだが、萬一世間へ知れやうものなら、頼むだ  
者も、頼まれた人も、大變な目に遣はなければならぬさうだから、なかく難か  
しいかも知れないね。」

「そんな危険なことなら、私合しますわ萬一露顯でもしやうものなら、大變事ですも  
のね。」

すると徳造が同意を表して、

「私も手術を受けることは斷然捨す方が宜いと思ふね、何故かと言ふと、悪いことは  
知れ易いもので、能く新聞紙などに、墮胎したのが露顯して、罪を問はれたことが  
載つてをるが、あゝ言ふことにでもなると、一家破滅の基だからね。」と否定した。  
發意者の道子も、兩人の反對に遇ふて、強ひてとは言はなかつたが、しかし引續い  
て意見を吐くのであつた。

「危険だと仰やるなら、手術を受けることは舍しても宜ございしますが、それでは他の  
方法を相談して、早く何とかしなければ、日が経つほど當人が苦しくなる理ですか

「らね、服薬でもさして見まうかね。」  
と相談した。

「服薬をさすと言つても、那樣薬を賣つてる家はあるまいから、何れお醫者に願はなければなるまいが、調劑して下れる醫士があるだらうかね。」  
徳造が不安さうに問ひ近した。

「それは私にも分りかねますけれど、あつてもなくても、無理にも願つて仕末をして遣らなければ、この娘が可愛相ぢやありませんか、ですから何とか方法を廻らして、頼むで見えて遣るのですね。」

「けれども迂濶に事情を話すと、とんだ失策を招ぐから、注意の上にも注意しなければなりませんよ。」と戒めた。

## 六十五

黒田辯護士方の一室で、いとも密かに語りつゝあるは菊岡徳造と、黒田鐵彦の兩人

である。徳造は心ばかり顔を突出して

「過般御目に懸つた際に、念のため御話しました清子妊娠の一件です」

其後月經を見ないのみならず、近頃に至つては食物の嗜好に變化を來しまして、  
しく悪阻の傾向が見えるのです、私共夫婦を始め、當人は申すに及ばず、豈夫に受胎してをらうなぞとは、夢にも思つてゐなかつたものですから、當人の名譽上、目を閉つて、其儘に打棄て置ましたけれども、最早争ふことのない現象を呈しましたから、打棄て置かれぬ身の上になりましたので、止を得ず御相談に上りましたが、如何致したものでせうか、實に當惑して施すべき策がないのです。」

と物語つた。黒田も有聲に驚いて

「それは意外千萬なお壻を聞きますが、眞箇御妊娠に相違ないでせうか。」  
疑ふやうに言つた。

「まだ専門家に診察さした理ではありませんけれど、妊娠者の示すべき現象と、經過すべき順序とを、遺憾なく顯してをりますから、實驗上正しくそれに相違ないと思

ふです。第一月經を見ないのが、何よりの實證だと考へます。』

「私の身に覺のあることですから、決して否定は致しませんけれど、しかし僅か一度で妊娠するといふは、如何にも不思議に堪へないですが、若しや藤川君の胤ではないでせうか、其邊は十分御確め下さつたでせうね。』

「藤川との中に出たのであれば、非常に満足こそすれ、どうして貴方へ左や右いつて来るものですか、藤川の出發後、確に見るべき月經を見たのですから、少しも疑ふ點はないのです。』

「さういはれて見れば、正しく私の責任に相違ないですが、菊岡さん、私も這度といふ這度は、眞箇因果應報の理を痛切に感じました、戀の慾情を制し得なかつたばかりに、どれほどの呵責に遭ふか、際限が知れないです、清子さんからは、責られます、貴方からは叱られます、剩へ木下のやうな悪漢に喚き出されて、今日まで數回強請に遭ひます。今又罪惡の塊が、清子さんの身に遺つたと聞きましたは、漫に寒心する外はありません、しかし事實御妊娠と極つた上は、御氣の毒ながら因果と御

諦め下さつて、無事に分娩下さる外致方ないと思ひますが、これに就いて何か御要求でもありますなら、如何なる要求にも應じますから、何なりと御遠慮なく仰やつて下さい。』

と深く答へた。

實に當惑致しましたが、しかし何事も約束と諦めて、成行に任せる決心はしてをりますが、それに就いて御相談致したいのは宅に置いて養生させましては近所隣家が煩くて困りますから、身二つになるまで、何處か東京を離れた土地へ遣りたいと考へますから甚だ申兼た次第ですけれど、養生費の幾分と生兒の引取方を御相談したいと思つて伺ひましたが、何分にも宜しく御願ひ致します。』

と訴へた、黒田は寸時考へた後、

「生兒に就きましたは、既に先般契約書が差上げてありますから、今更否やは申しませんが、養生費は如何程差上げたら宜いでせうか、御内意が承はりたいものです。』

と答へた。

「當分は一人置ましても差支へあるまいと存じますが、着帯でも致しますと、看護婦を頼まなければなるまいかと思ひますから、其邊を御含み下さつて、然るべくお願ひ申したいと思ふのです。」

「それでは、不足でせうけれど、本月以後月々五十圓宛差上げますから、それにて御辛抱が願ひたいですが、如何でせうか。」

## 六十六

「五十圓宛頂けば、十分な手當が致されやうと思ひますから、どうか御氣の毒ながら宜しく御願ひ致します。」

徳造が承知の旨を答へた。

「元來ならば、十分に差上げなきやならないですが、實は近々結婚することに決定してをりますので、非常に金錢の必要を感じてをりますから、十分な養生費を送る理

に、私の方の事情が許さなさいです、甚だ相済みませんが、それにて御辛抱が願ひたいです。」

「本來なれば、斯様なことを願ふべきではないですが、薄給に暮してをるために、餘義なくお願ひしたので、必ず悪く思はないで下さい……。」

「何事も私の失策から起つたことで、そんな御心配かけて申譯がないです、清子さん始め、皆様が、憎むべき奴だと御立腹でありませうけれど、只管御許しを願ひます。」  
 「しからは、清子の病氣に就いては、さういふことに願ふと致しまして、例の木下であります、頗る強硬の態度で談判を遂げました結果、再び強請しないといふ契約書を認めさせまして、二百圓といふ請求を五十圓與へて歸しましたが、意外にも其後斷然なくなりましたから、不思議に考へてをりましたけれど、それでは私の方へ來ない代りに、貴方の方へ參つて、相變らず秘密を種に強請してをると見えますね。」

「私も彼の男には、熱々困らせられますが、去り逆秘密を握られてをるために名譽上



拒絶して了ふこともならないし止を得ず三十圓、二十圓と、數回與へてをりますが金子は左に右、無遠慮に來訪されるので、ほど／＼當惑してゐるのです、しかし二百圓の請求を僅か五十圓で承諾したのみならず、其後來ないといふは、貴方の談判の爲方が宜かつたのでせう、それでなくて、なか／＼承知する奴ではないですからね。』

『どう感じたものですか、左に右其後は參らないです、就きましてはあの際頂戴した百五十圓の殘金を、直にお返し申さうかと存じましたけれど、何時又請求に來るか知れないと考へましたので、其儘お預りして置きましたが、最早參る氣勢も見えませんが、懷中から百五十圓の金子を取出した。黒田はそれを推止めて、

『それは御丁寧の段感謝致しますが、しかしあゝいふ無頼漢ですから、何時強請に伺はないとは限りませんし、どうせ月々差上げなきやならない金子もあるのですから、その金は其儘お持を願ひまして、幸ひに木下が來なければ、月々の費用へ御使ひ下されば、大きに好都合を得るのです。』

『左様でありますか、それではお辭に従ひまして、この儘お預り申して置きますが、木下が參らない節には、清子の費用に使用致して宜しうございませうか。』

『どうかさういふことに願ひたうございます。』

『委細心得ましてございます。』

『願ひは、藤川君に知れないやうにしたいものですが、留學年限は、確か三ク年でしたね。』

『左様です、三ヶ年の命令を受けてをりますから、中途で歸るやうなことはあるまいと存じますけれど、萬一陸軍省の御都合で、呼返されることでもあると、實に大變だと、そののみ心配してをります。』

『餘程の事情がない限りは、中途で呼戻すやうなことはあるまいと思ひますが私もそんなことのないやうに、蔭ながら祈つてをります。』

『彼や是やを考へますと、誠に心配に堪へられないです……しかし御多忙中を失敬致しました、何分にも宜しく願ひ致します。』

「どうかお體を大切にすつて下さい、失禮致しました。」

## 六十七

清子の妊娠は、正しくそれと確定した、母の道子は、如何にもして月の重ならない中に、始末を附けて了はうと、種々に手を盡して、藥劑を求めては、服用させて見たが、何の効驗も無いために、失望落膽して、共に嗟嘆の聲を洩らすのであつた。

「こんなに取り替引替藥劑を服用しても、それらしい様子が見えないんだから、もう約束事と諦らめて、成行に任せるより外ないわね、萬一藥劑の爲に、體に害を及ぼすやうな事があつては困るからね。」

道子が諦めたやうに言つた。清子は涙含むで、

「これほど手を盡して目的が達げられないのですから、運命と諦める外ありませんわ……成行に任せて置て、萬一藤川に知れた際は、事實を残らず話した上で、許して下れなかつたら、一生獨身で送りますわ。」

ほろりと涙を落した。道子も同情の涙を零して、

「秘密が秘密として、死ぬまで隠し果せるなら宜いけれど、萬一藤川に知れて離縁でもされやうものなら、眞箇一生を棄て、了つたも同然だからね……繰返すやうなけれど、思へは思ふほど黒田と言ふ人は、お前のためには大悪魔だわね。」

「恚う言ふ惡運命に生れて來たのですから、もう何う成らうとも、成行に任せて心配致しませんわ、餘り心配したので胸が痛く成りましたもの、病氣でも發すと大變ですからね。」

「然うですとも、心配しても成るやうにしか、成らないものだから、必ず心配しないが宜いよ、こんな心配から肺病や心臟病が發ると言ふからね。」

慰さめるやうに言つた。

「ですから、一日も早く人里離れた場所へ赴つて、身二つに成るまで、靜に養生が致たうござんすわ。」

「來度の日曜日に、父様が、大森邊へ往つて、座敷を借りて來ると言つて居らしたか

ら、それまで行つて居らつしやい、餘り交通の不便な場所では、いざと言ふ節にも困る場合がありますから矢張大森か、遠くも川崎邊が宜いと思ふのよ。」

「大森でも川崎でも厭ひませんから、成たけ人目に懸らない場所が宜ござんすわ、身輕になるまでは、絶対に世間と離れて了ひたいと思ひますから……。」

「父様に能く頼むで置くが宜いわ、日曜でなければ往かれないやうに言つてらしたからね。」

「藤川から書面が來たら、早速速達で送つて頂戴ね、宅に居るやうに見せなければ、疑がはれますからね。」

「そんな事は心配爲なくとも、萬事私が心得て居るから着くと直に送つて上げるよ。」

「黒田が行先を問ねるかも知れませんが必ず知らさないで下さいね。」

「どうして知らすものかね、準吉にだつて、行先は知らさないが宜いよ、秘密と言ふものは洩れ安いのだからね。」

「私がこんな體に成つてるとも知らずに私の事を心配して居て下れると思へば藤川へ

對して眞箇申譯がありませんわ。」

術無げに言ふ、

「濟まないには濟まないけれど、しかしお前さんが好き好むで爲た理ではなし眞箇惡魔に魅入られたのだから、そんなに心配するに及ばないわ。」

心中には無限の心配爲ながらも、口頭では努めて慰めるのであつた。

しかし、この頃にやうに氣分が悪しくツは、死んで了うか知れませんが、何う言ふものか、随分胸先が苦しいのですから……。」

「那樣氣の弱い事をお言ひでないよ、妊娠は女の持前なもの、苦しいには苦しければ、死ぬやうな事は決して在りませんよ。」

## 六十八

日曜日の夕方であつた。徳造は外出先から歸つて來て、洋装を和服に着換えて二階へ上つた。二階には清子が寂しさうに、机に凭れて、暮れ行く秋の外面を眺めなが

ら、何事か考へてゐる折柄であつた。徳造の姿を見ると心ばかり笑を泛べて、

「おや、何時お歸りなすつて、少しも存じませんでしたわ、お疲れなすつたでせうね。」

「随分方々歩き廻つたので、意外に疲労を覺えたが、しかし宅へ歸つて來たらさほどでもないやうだ。」

言ひつゝ、徳造は、坐に着いた。

「今日はお天氣が宜ございましたから、お暑くてゐらしゃいましたでせうね。」

「日中は随分暑かつたよ、何しろ八十七度だつたからね。」

「宅にゐてさへ汗が出る位でしたから、定めてお暑からうと思つて居ましたわ……如何でございましたか、適當の場所が見附りましたでせうか。」

徳造は卷簾を喫しつゝ、

「見附けるには見附けて、約束はして歸つたが、しかしお前の氣に入るか何うか知れないと思ふのだ。」

「場所は何方なでせう！」

「場所は大森の山の中で、加藤忠助と言ふ水呑百姓の家の離房なんだ。二丁ばかり往くと、伊藤公爵を祀つて在る。谷垂の基地が在つて、公爵邸へ一丁ばかり離れた、野中の一軒家だ、少し寂し過ぎるほど静な家だが、宜い事には、忠助と言ふのは六十五六の田舎爺で、まますと言ふ婆さんの中に、娘が二人あつて、姉娘に養子を迎へて、もう八つになる孫がゐるさうだが、鐵道局へ勤めて、現在は夫婦と小兒とで満州へ往つて、南滿鐵道へ勤務してゐるとかで、家には老人夫婦と、妹、娘と十七八に成る甥がゐるばかりで、四人暮なんだ、離房と言ふのは、三四年以前に、忠助の隠居所に建てたのだと言つてゐたが、八疊と四疊半の二室限だけれど床の間も附いてゐるし、田舎の坐敷としては、些と小綺麗に出來てゐるのに不味物を我慢さへすれば、賄も爲て遣ると言ふから、至極都合が、好いと思ふて、左に右借りる約束にして、手附だけは渡して來たけれど、お前の氣に入るか何うか知れないから、一度往つて見るが宜からうと思ふのだ。」

「お父様が適當だと思つて下さるのなら故々往つて見るまでにはございせんわ却つて

那樣片田舎の方が、人目に懸らなくつて宜いと思ひますから、其家に極めて了ひますわ。」

「大崎から大森、川崎邊まで歩き廻つて聞かせて見たけれども、下宿稼業の家なら、いくらでも在るが、素人家でもつて、片田舎を捜すのだから、在りさうに見えて、なかなか無くて、殆ど捜し飽て了つたのだ、眞箇の水呑百姓だから、萬事が不潔たらうけれども、我慢が出来なかつたら、又外を捜すとして、當分往つて見るのだね、逆も御飯の副食物などは、食べられないであらうと思ふから御飯だけ焚いて貰つて、副食物は魚肉の類を買つて食べたり、東京から罐詰類を送るから、そんな物で辛抱するのだね。」

「何うせ死んだ氣でゐますから、どんな辛抱でも致しますわ、長い間の辛抱ではないんですからね。」

「それでは、はがきで可否を知らす筈になつてゐるから、早速知らせ遣らう、然うすると、綺麗に掃除をして、障子を張替るやうに言つてゐたからね。」

「どうか然うして下さいな、まだ二ヶ月位は往つたり來たりしても、人目に怪まれる事はないと思ひますから、寂しくて困る節は、時々歸つて來ますわ。」

「では、直にはがきを出す事に致やう。」

## 六十九

黒田鐵彦と大久保秋子との結婚は、脇坂代議士が媒妁の下に、九月下旬の良日を卜して大禮を挙げた、鐵彦に秘密の在る事など、夢にも知らない秋子は、滿腔の愛を捧げて、只管圓滿の家庭を希望するのであつた。

「ね貴方、この春東京へ來て歸つた時、藤川と清子との事を、両親へ話して聞かせましたら、父は藤川に限つて那樣不品正な事はないといつて、私か婚約を斷つて下さいといつても、斷乎として承入れて下れなかつたのです、ところへ反對に藤川の方から、私が親しく看護を爲なかつたといふのを口實にして、破約を申送つて來たものですから父は私の不行届を憤つてゐたやうですけど、間もなく菊岡の娘と結

婚するといふ新聞を見まして、其時初めて私がいつた辭が、事實であつたと思つた様子で、それからは寧ろ私に同情して下りましたのよ、私も二人の間を變だとは思つてゐましたけれど、眞實關係が有るか無いかは、想像だけの事でしたから、何うか知らと思つてゐましたが、結婚と聞いたので、扱は矢張然うであつたかと、貴方の判定力に驚きましたわ。しかし彼人等が結婚して下れたので、私等の爲には眞箇好都合でしたわね。」

秋子が黒田の顔を見上げて、微笑みつゝいつた。

「清子ほどの美人と、三年間も同じ家で暮してゐて、戀に陥らない道理はないからね、私は當然來るべき結果だと考へたから、それで貴女に注意を與へたのだ、しかし私共の結婚には、眞箇都合が宜かつたです。」

「私あの際父から貴方の消息を聞かれましたから、それはく賞めて話して置きましたのよ。少しでも父の信用が得たいと思ひましてね。ですから恁麼にすらくと纏りましたのよ。」

「それはどうも憚りさま、改めて感謝爲ます。」

笑みつゝ心ばかり頭を下げた。

「あら、お禮なぞ仰やらなくても宜ござんすわ、貴方の爲ばかりではないんですもの……しかし清子さんは藤川と一緒に往つたのではないでせうが、何うして居らっしゃるか、御存じなくて」

問ひかけた。清子の消息を問ねられたのは、ギクリと胸に釘を打たるゝ如く覺えたが、色にも見せず。

「藤川が出發する時、新橋へ見送つて遣つたきり、更に消息を聞かないけれど、清子は自分の宅にゐるのだらうと思ふが、どんな事か知ら……」

と知らぬ顔に答へた。

「今後途中で出逢ふ事でもあつたら、何と挨拶するでせうね、一度會つて遣りたいと思ひますわ。」

「扱は藤川を奪られたのが、口惜しいと見えるな、はゝは。」

「あら然うぢやありませんわ、私が往つた時如何にも淑かさうに、虫も殺さないやうな顔してゐましかから、這度會つたらどんな顔するか知らと、それで會つて見たいのよ。」

ところへ責生が慌しく入つて来て、

「先生、例の奴が参りました、御目に懸りたいと申しますか如何致しませう。」と問ねた。黒田は忽ち心ばかり眉を擧めて、

「然うか、會つて遣るから應接室へ通しておけ。」

「はい。」と書生が立去つた。

「例の人ッて何をする方なんです！」

秋子が問ねた。

「何有、事件の鑑定を頼みに来るのだがいくら説明して遣つても、それが解らない男だから、書生までが輕蔑するのだよ。」

いひつゝ室を出て、應接室へと入つた。應接室には、例の木下祐天が、微醜を含む

で待受けてゐた。黒田は低い力の在る聲で、

「君は又、金錢を請求に来たのかい。」

いひつゝ椅子に着いた。

## 七十

木下は酒氣を吹きながら、

「先生は有繫に辯護士だけあつて、お察しが宜いや、お察しの通り、毎度ながら少々拜借に上りました。實は先日向後決して上らないといふ約束爲ましたから、本來なれば來られた義理では無いんですが、昨夜友人に誘はれて、遊に往きましたところが、ツイ身分不相應な遊興を致しまして、遊興費に不足を告げましたので、止むを得ず附馬を連れて歸りまして、着てゐる衣類を典物にして拂つて遣りましたところから、御覽の通り、寝衣同様な拾一枚に成りまして、外へ出るのも外聞が悪い位です。だからまあ御馴染効に、先生にお願ひ申して、御援けに預りたいと考へまして、そ

れで伺ひましてございます。どうかまの執念深い厄介者と思ひなされるでせうけれど、因縁盡だとお諦めなすつて、多分な事はお願ひ申しませんから、どうか三十圓だけお貸しなすつて下さい。」

「君は私が金の生る木でも持つてるやうに思つてると見えるが、まだ漸と玄關を開いたばかりの辯護士で、眞箇の駈出者だから、玄關こそ張つてをるけれど、裏は火の車で、金なんか殆んど無いから、這麼に際限なく遣つて來ても、然うく請求に應ずる事は出來ないから、這度だけはどうか外で都合を附けて貰ひたいものだね。」と拒絶した。

「そりや他で都合しろと仰やれば、都合致ないことはありませんが、毎度いふ辭ですけど、例の秘密を賣つて宜いと仰やるなら、何時でも五十や百の金子には有附ますが、それでは貴方が御迷惑なさるであらうと思ひまして、それでお願ひに上つたのでございます、秘密を賣つてもお差支へないんでござんせうか。」

極た強請文句を列べた、黒田は例も此文句で惱まされるのであるから、又かと思々

しくて堪へられないのであるが、さりとて秘密を口外された日には、身の破滅を覺悟しなければならぬから、切齒して憤慨しながらも、熟と考へてをつたが、

「それでは、請求に應じない時は、あれほど度々金子を強請つて置きなながら秘密を他に賣附けて了うといふのだね。」と念を推した。

「だつて背に腹は替えられないから、止を得ないぢやありませんか、貴方の苦しいのと、私の苦しいのとは、同じ苦しいにしても、比較になるものぢやないですから、二十や三十の端金金は、それも三日に飽ぎず上る理ではなし、月に一度か、山々二度より上らないですから、秘密を握られた年貢だと思つて、お小遣錢を御儉約なすつて下すつても宜ぢやありませんか、かう申すと釋迦に説法ですが、あの秘密が新聞紙上へでも掲載されて御覽なさい、御名譽ばかりぢやありません、事に依ると刑法上の大問題が持上らないとは申されませんが、さうなると貴方の名望は地に墜ちて了ふではありませんか、私はお金子にさへなれば宜いのですから遣らないと仰や



れば、お氣の毒ながら他へ洩らして下しますから、何れになりと御決心なすつて下  
さい。」

と、飽まで秘密を餌に脅迫するのであつた、黒田は俄に笑顔を作つて、

「なるほど君のいふ通り、秘密を握られてをる限りは、弱點は此方にあるのだから、  
少々位な年貢を拂ふのは當然かも知れないから、如何にも君の要求に應じるが、し  
かし今といつては困るから、今後九時頃まで待つて貰ひたい、するとこれから金策  
に出で、其足で直に君に會見するから、御足勞ながら九時頃に日比谷公園の霞門で  
待合してゐて下れませんか。」

「宜しうございます、それでは九時を相圖に霞門で待つてをります。」

## 七十一

夜の八時半、彼は九時に垂々とする頃であつた、日比谷公園の霞門を入つた右手に  
當る、唯在る淋しい樹蔭の下のベンチに腰を掛けて、密々と語ひをるは、黒田辯護士

と木下祐天の兩人である。彼等は日中の約束に従ひ、霞門で會見して、打連れて園内  
に入つて、このベンチで相語らふことにしたのである。

「約束の通りお金子は持つて来たから、渡すけれども、渡すに就いては君に少しく話  
さなければならぬことがあるのだ、それは外のことではないが、君は秘密を握ら  
れた年貢と思つて、二拾や三拾の端金は、月々渡せといつてゐたけれども、金  
子の在る身分なら、それは百でも二百でも、君がいふ儘に渡すけれども、眞箇先輩  
の辯護士が、星の如く競争してをる中へ、學校を出たばかりの無經驗者が、開業し  
たのであるから、職業が職業だけに、玄關だけは何うにか張つてをるけれども、漸  
く家賃と生活費の幾部分の収入が在る位なもので、開業以來負債ばかりが嵩むで二  
進も三進も取れなくなつてゐるのだ、だから君は小遣錢を儉約して渡たせなんと暢氣  
なことをいつてゐるけれど、なか／＼小遣錢どころか、三拾圓の金子が在れば、生活  
費にどれほど助すけになるか知れたものぢやない、恚ういふ事情で實際非常に困難  
を極めてをるのだから、もう好加減に苦しめることを舍して、この金子を限ぎりに

暫時容して下れないか、この事が話したかつたけれども、今日は君が銘酩してゐたから、それが爲めに故々此處で渡たす約束をして、この話を爲やうと思つたのだ、君だつて元々悪黨ぢやないのだから、少しは私に同情して下れたつて宜いぢやないか、其代りには、金子の在る時には、君が要求しなくとも、私の方から内々通知して、必ず渡して遣やるよ、どうかこのことに就いて、君の決心が聞かして貰ひたいのだ。』

と諄々と説いた、木下は腕を組むだまゝ、熱心に聞いてをつたが、

『貴方の仰やることは能く解りました、それでは貴方の要求は這度と言ふ這度は必ず承きますが、其代りには私の要求も承諾して頂きたいです、それは今日願つた三十圓の外に、三百圓だけ商賣の資本が貸して頂きたいです。さもなければ、今日のやうに浮浪生活をしてゐた日には、生活に困難するものですから、濟まないと思ひながら、又してもお願ひに上るやうな羽目に成つて來るのです、三百圓と纏つた資本があれば、目的の商賣を開いて、正業に就きますから、自然御厄介に上らなくとも

濟むやうになりますから、どうか交換條件として御承諾が願ひたいです。』  
と難題を持出した。

『その三百圓の金子が調達されるほどなら、かうして君に頼まなくても、要求に來る度毎に二十なり三十圓なり、黙つて進上するけれども、どう奔走して見ても、到底金子の出來る目的がないから、それで内情を打明けて頼むでをるのだから、そんな難題を言はずに、どうか快く承諾して貰ひたいものだね。』

『そりや貴方が無理と言ふものです、せめて半額でも都合して遣るから、かうしろと仰やるなら、まだしも御相談が出來ますが、三十圓だけで縁切にしやうと言ふのは餘り虫が好過ぎます、折角のお辭ですがこればかりはお断り致します。』  
と拒絶した。

『それでは、どうあつても承諾して下れないのだね。』

『お氣の毒ですがお断り申します。』

『それでは止を得ないから、その話は中止にして、左に右三十圓だけを渡すから受取

つて下らう。」

と懐中から取出して渡した、木下は瓦斯燈の光に検めて受取つた。

## 七十二

「しかし、この三十圓を頂きましたからこれで暫時は大丈夫です。どうも有難ふございました。

木下は一禮を述べて別を告げた。而うして樹下閣の途を辿つて幸門の方向を差して歸るのであつたが、十歩ばかり歩むた頃、何處よりともなく、銃聲が聞えたが、同時に渠は途上に倒れて、悶掻き苦むのであつた。

「あ痛々……扱は黒田の奴、欺撃にしやアがつたな、あ痛……」

疵口を押へながら、口惜しさうに呟いたが胸部を背後から射貫かれた爲に、呼吸は漸次苦しくなつて、聲を出す力も失せた。

「救ひ……て……」

叫んで見たが、もう響くだけの力はなかつた。ところへ黒田は不安さうな様子をして進み寄つた。而して凝乎と木下の様子を眺めてをつた木下は頻りに悶え苦しむで、手足を動してをつたが、止度なく迷しり出る鮮血と共に、次第に呼吸が衰へて、手足を動す力もなくなつて了つた。黒田は尙も傍に寄つて覗くやうに眺めた後、もう恢復の望がないと見て取つたので、冷かに笑を洩らしつゝ、

「莫迦な奴だね。」

と心に罵りつゝ立去つた。而うして數步行過ぎると、瓦斯燈のある下が威風堂々たる紳士に出會つた、が、紳士は黒田の顔を見るが否や、

「失敬ぢやが、君はどうかされたのぢやないか、顔色が眞青ですぞ。」

と辭をかけた。黒田はハツと駭きつゝ、

「別に界状はありません御親切に有難う……」と脱帽して禮を述べた上、匆々立去つた。紳士は不審の眉を擧めて見送つてをつたが、

「異状がないとは不思議ぢやな、至て死人のやうな顔色ぢやつたが……」

吐きつゝ、握太のステッキを小脇に抱込むで、悠々と濶歩するのであつたが、數歩進むと忽ち何者か途上に倒れてをるのを認めたので、

「こらくどうしたのぢや。」

いひつゝ傍に寄つたが、腥い異臭が鼻を衝いたから、紳士は早くも尋常事でないと思つたので、ステッキを投げて、早速両手をかけて起さうとしたが、暗ながらも鮮血が夥しく流れてをるのが認められたから、軀を動しては、却つて疵の爲に能くないと考へたので、耳元に口を寄せて、

「こらく、氣を確に持て、傷は浅いぞ。」

と大聲に呼んで見た。其聲が耳に入つたのか、木下は手足を少しばかり動かして、

「敵は黒田だ……」

漸く聞き取れるほどの聲で言つた。紳士は重ねて、

「黒田とは何者ぢや。」

と問ひ返したが、何やら口の中で答へるやうではあるが、しかしそれは少しも聴取

れなかつた。紳士は今出逢つた死人の如き顔をした男が、確に加害者の黒田なる者であらうと思つたが、到底追捕する見込がない爲に思ひ止つた。折柄二人連の學生が通りかゝつたので、紳士は呼留めて、

「こらく、君等は御苦勞ぢやが、此處に重傷を負ふて倒れてをる人があるから、最

寄の派出所へ駈け着けて、巡査を呼んで下れないか。」

と頼むだ。

「さうですか、それは大變ですね、宜しい僕が往つて呼んで來ます。」

と、甲生が駈け出した。乙生は恐怖を感じながら其處に留つて、負傷者を覗きながら、紳士に向つて、

「どうして負傷したのでせう血腥臭いところを見ると、餘程出血してるやうですね。」

「私も今通りかゝつて見附けたばかりぢやから、様子は更り分らんが、喧嘩でもしたのかも知れないな。」

か  
く  
し  
兒  
終

樋口隆文館

營業案内

貸本營業の方又は取次

販賣營業の方

御取引を開始やうと思はる方は郵券三錢御送り下されば、早速に御直目録を御送りいたします。

△樋口隆文館は日本に於ける唯一の貸本向小説専門の御問屋でありますから、貸本向の小説なれば東京版でも大阪版でも一切取り揃へて御安ういたします。

△樋口隆文館は自家出版物のみにては現に六百種に所収して居る者です。安んして御懸念無く御取引を願ひます。樋口隆文館は毎月新版月報を御得意様へ無料で御知らせ致します。

△樋口隆文館は毎月赤字事なく際々新書を發行いたします。其作者は現代に於ける知名の小説家で加之に内容が面白く口給が奇麗で其の製本の形式までがすべて貸本向に出来て居ります。

△樋口隆文館の營業場所は大阪市南區三休橋、谷南へ入西側、振替番號は大坂八七九七

大正六年三月六日印刷  
大正六年三月十日發行

定價金七拾錢

不許複製

【附夾兒しくか】

著作者 瑠璃生

大坂市南區鏡谷中之丁  
二百二十四番屋敷

發行者 樋口源次郎

大坂市南區連町四丁目  
十二番地

印刷者 紅野次郎

發賣元 大坂市南區三休橋 樋口隆文館  
(振替口座大坂八七九七)

目書版藏館文隆口樋

靜齋中村巷先生著	足立栗園先生述	押久保利水先生編	井土靈山先生檢閱	坂井松梁先生序文	前内務大臣子爵 服部北溟先生訓解	井土靈山先生選註	井土靈山先生選註	前文部大臣 小松原英大郎閣下題字
評釋正氣歌詳解	解訓六韜三略	解訓孫子	註訓ポケット寒山詩	註評ポケット老子	詳訓註ポケット孝經	註選杜少陵詩集	註選蒙求通解	
附名家傳誦時歌集								
一	一	一	一	一	一	一	一	冊一數
送定價參拾五錢	送定價六拾五錢	送定價四拾五錢	送定價六拾錢	送定價四拾錢	送定價四拾錢	送定價六壹錢	送定價八拾五錢	

りない描書頁るせ買充の容内は物版出の館文隆口樋

**花鳥叢書**

この花鳥叢書は、他にある同形の文庫のそれのやうに、千編一律單調同趣のものとは異つて、武勇談あり、落語集あり、探偵譚あり、忍術物語あり、非劇小説あり、戀愛小説あり、千編十様に變つた妙趣を含蓄して居ます。故に、男にも向けば、女にも好かれ、大人にも讀まれ、少年にも適した携帶にも至便な讀物でございます。

一	探偵小説 血染の手巾	七	無敵勇荒象園鬼門
二	戀愛小説 戀しき仇	八	少年槍の小太郎
三	探偵小説 幽霊船	九	八番御前大試合
四	落語 金馬集	十	名槍術佐分利左内
五	幻術使 仙冠者義虎	十一	日本武術流祖録
六	使天狗 木鼠小法師	十二	破畑伴造天下巡遊記

宛錢五十二冊一各 宛錢二冊一各 宛錢二冊一各 宛錢二冊一各

三	元田文五郎旅日記	三三	小説 すめる心
四	怪退治 春日武勇傳	三四	御前忍術大試合
五	怪退治 春日光俊旅日記	三五	怪談 幽霊の出る池
六	三傑 大力重太	三六	名槍術 大阪百人斬
七	三傑 忍術佐助	三七	女義士 井筒女之助
八	三傑 金崎英五郎	三八	小説 妻の罪
九	後藤又兵衛旅日記	三九	幻術 武田三勇士
十	小説 魔の棲む洞窟	四〇	三上 杉妖怪退治
十一	無敵勇 朝比奈三郎義秀	四一	小説 房江と小百合子
十二	名槍術 木村太郎丸	四二	小説 武士系
十三	鎮西八郎為朝	四三	小説 片破れ月
十四	怪退治 清水冠者義高	四四	小説 因果經

宛錢五十二冊一各 宛錢二冊一各 宛錢二冊一各 宛錢二冊一各

樋口隆文館蔵版書目

高嶋嘉右衛門先生合著 柳田農作先生	宋 徐東齋先生原撰 日本 山岸乾齋先生編述	星文館主山岸乾齋先生著	權少教正川原廣齋先生著	工學博士平賀義美先生題辭 六郎先生序文大瀧古 記者橋本宗策先生編	東京製菓研究會主任教授 農商務省囑託菓子科長 日本女子大學菓子科教授 樋口佐吉先生著	大阪毎日新聞記者 實橋業力善行會君著	諸戶清六氏題著 實業力行會著
獨修 易學通解	訂正 推命寶鑑	年鑑	精義 九星判斷獨案内	實用 工藝大鑑	直ぐ應用 菓子製法新書	無資本 新實業成功法	無資 成功家實歷
册一 一	三	一	一	一	一	一	一
定價壹圓半錢 送料八錢	定價貳圓半錢 送料拾貳錢	定價五拾錢 送料四錢	定價四拾錢 送料六錢	定價八拾錢 送料八錢	定價九拾錢 送料六錢	定價五十錢 送料六十錢	定價五十錢 送料六十錢

樋口隆文館出版の物は内容充實せざるは補ひなり

三

樋口隆文館蔵版書目

文學博士 服部宇之吉先生書翰 求堂處士 的場銈之助先生講說	支那北京 梁振武先生跋 日本 宗内靜庵先生編	沖津陽谷先生述	高飾北齋翁筆	全國寶物取調委員長正三位 伯耆東久世通禎閣下題 文山樋口徳翁編纂	吳夏文彦士其纂 河村貞山詳譯	正三位勳一等伯爵附安房 閣下題字、南州外史近藤 元粹先生題序、優美館主 人、文山樋口徳翁合編	大勳位有栖川宮熾仁親王 殿下題字、太勳位小松宮 彰仁親王殿下題字	優美館主人編輯
精神論語の論語 附論語格言解	儒教 古文孝經精解	四子 修養訓	淨瑠璃圖繪	日本 畫家人名詳傳 附諸家印譜及鑑定書	圖繪寶鑑人名詳傳 附諸名家款印譜	日本 名家人名詳傳 附諸名家肖像及款印譜	日本 美術鑑定便覽 附諸名品圖說	
册一 一	一	一	二	三	一	三	三	
定價四拾五錢 送料六錢	定價四拾錢 送料四錢	定價五拾錢 送料四錢	定價貳圓 送料八錢	定價壹圓半錢 送料拾貳錢	定價壹圓 送料六錢	定價壹圓半錢 送料拾貳錢	定價壹圓半錢 送料拾貳錢	

樋口隆文館出版の物は内容充實せざるは補ひなり

二

◀ 樋口隆文館藏版書目 ▶

同	淨齋中村巷先生編	岩垂憲德先生輯	與謝野鐵幹先生著	長谷川時雨女史著	黒公子先生著	兒玉花外先生著	大平野虹先生著
美文熟語資料	故事釋義 作文資料	譬喻佳言 文章資料	鐵幹子	燕脂傳	現代女性觀	日本艷女傳	名媛日記
一	一	一	一	一	一	一	冊一數
送料四拾錢	定價參拾錢 送料四拾錢	定價參拾錢 送料四拾錢	定價四拾錢 送料四拾錢	定價四拾錢 送料四拾錢	定價四拾錢 送料四拾錢	定價四拾錢 送料四拾錢	定價四拾錢 送料四拾錢

五

樋口隆文館出版物の内容は完全の書目通りなり

◀ 樋口隆文館藏版書目 ▶

小嶋ふみ子女史著	長谷川時雨女史著	秋山樗庵老師講話	山田孝道師祖字 石飛、大野、歌麿三師合著	永源寺派管長 蘆津實全禪師著	糸左近先生著	糸左近先生著	糸左近先生著
現代男性觀	日本美人傳	佛典國字解 第一一四十二章經	佛教百話	禪海一味	男女衛生顧問	食餌療法	無藥療法
一	一	一	一	一	一	一	冊一數
送料四拾錢	定價四拾錢 送料四拾錢	定價貳拾錢 送料貳拾錢	定價五拾錢 送料六拾錢	定價五拾五錢 送料六拾錢	定價六拾錢 送料六拾錢	定價六拾錢 送料六拾錢	定價六拾錢 送料六拾錢

四

樋口隆文館出版物の内容は完全の書目通りなり



← 樋口隆文館藏版書目 →

同	橘千蔭大人書	中村米次郎先生著	三十三名家文集	武嶋敏雄先生著	羽田寒山先生著	同	靜齋中村巷先生編
大歌所御歌	草書千字文	自達筆習字速成獨案内	美文韻文白百合	二十世紀の祝文	美文韻文作法	言文一致文範	作文熟語資料
一	一	一	一	一	一	一	册 一册
送料價四拾錢	送料價四拾錢	送料價四拾錢	送料價四拾錢	送料價四拾錢	送料價四拾錢	送料價四拾錢	送料價四拾錢

六

樋口隆文館出版物の内容は実充の書目と異なる

577  
525

終

大阪樋口隆文館發行

